
浮舟

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮舟

【Nコード】

N13860

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

海の上で難破した親友二人。だが互いを見捨てることなく。哲学等でよく言われるお話から書きました。

第一章

浮舟

船は難破した嵐によってだ。

イシュメールとクイーケグは海に投げ出された。だが何とか小舟を手に入れてそこに乗った。

嵐が去り二人は大海原に取り残された。しかもである。

「水はないか」

「食べ物もな」

そんな状況だった。しかもだ。

「この小舟もな」

「ああ、かなり傷んでいるな」

「相当な」

二人が乗るその小舟もだった。相当だ。

イシュメールは中肉の白人でクイーケグは日に焼けた肌をしている。彼は南方から来たらしい。それでその肌はそうした色であった。

イシュメールとクイーケグは人種こそ違うがそれでも船の中では付き合いがよかった。親友同士とも言ってよかった。そうした間柄である。

その二人が今小舟の中に一緒にいる。しかし今二人は二人だけではない。もう一つの存在と一緒に乗っているのだった。

「まずいな」

「ああ、小舟も今にも沈みそうだ」

「危険だな」

「全くだな」

二人で話す。今彼等は危機と共に小舟の中にあるのだ。

そしてだ。二人はそれをはっきりと感じていた。そのうえで今い

るのだ。

だがそれでも生きなくてはならない。まずはイシュメールが言った。
「なあ」

「何だ？」

「まず水は雨を待とう」

水について話すのだった。周りは大海原で見えるのはその青い海と空、そして白い雲だけだ。そうしたもの他は何も見えはしない。

「水筒はあるしな」

「そうだな、水はそれでいいか」

「そして」

クイークエグに対してさらに話す。

「食べ物だけれど」

「それはどうする？」

「魚を釣ろう」

そうしようというのだ。

「それで手に入れよう」

「わかった。それなら」

ここで彼は海の中にさつと手を入れた。そしてそのうえでだ。

小舟の中にあるものを入れた。それは一匹の魚だった。

そしてまた手を入れてだ。もう一匹入れたのだった。

「これでいいな」

「もう獲ったのかい」

「これ位俺の国じゃ普通のことだからな」

笑ってこうイシュメールに言ってみせたのである。

「こうして魚を獲るのも」

「普通なのか」

「ただ。捌くのはイシュメールの方が上手いな」

「まあ俺は元々厨房にいたからな」

見れば彼はその魚をすぐに持つて持っているナイフで捌きだした。その

手捌きはかなり鮮やかだ。鱗を取り身と骨を切り離してだ。そのうえでクイークエグに対してもその身を差し出した。

「じゃあ食うか」

「悪いな」

「気にするな。しかし」

彼はここで困った顔になってクイークエグに話した。

「困ったことになったな」

「今か」

「ああ。今俺達は何処にいるんだ？」

「さてな。それが何処かさえもわからない」

「まずは夜になるのを待つか」

イシュメールは今度はこう話した。

「それで星を見るか」

「それでおおよそのことがわかるな」

「場所はな。それでな」

「そうだな。それじゃあそれまでは待つか」

「ああ。それでだが」

「んっ？どうした？」

「雨が降らない場合はどうする？」

クイークエグに対してこのことを問うたのだ。

「すぐに振らない場合はだ。それはどうする？」

「血がある」

彼はこうイシュメールに答えた。

第二章

「魚の血がだ」

「魚のか」

「そうだ、それを飲めばいい」

これがクイーケグの言葉だった。

「それでどうだ」

「魚の血か」

「水がないのなら血がある」

彼はまた言った。

「それを飲めばどうだ」

「そうだな。そうするか」

「そういうことだ。そうしてまずは生きよう」

クイーケグの言葉は真剣なものだった。生死がかかっているからこれも当然のことだった。そしてそれはイシュメールも同じだった。

「それでいいな」

「よし、それならな」

「わかった」

こう話してだ。まずは夜を待った。そして星を見る。二人はその夜空を見て苦い顔になってしまった。

「まずいな」

「そうだな」

二人で言い合う。夜空は眩く美しい。だが二人にとってはその美しさも今は目に入らない。それを見ながらそのうえで言っていた。

「陸地は遠いな」

「海の真ん中か」

「考えてみればな」

イシュメールはその夜空を見上げながらまた話した。

「それも当然だな」

「そうだな。俺達が嵐に遭ったのは海のと真ん中だった」
クイーケグも言う。

「だとすれば俺達が今いるのもだ」

「海の真ん中で当然か」

「そういうことになる。今はな」

「陸に向かうにしてもな」

イシユメールの言葉に今辛いものが宿った。

「それもだ。この小舟だとだ」

「辛いか」

「ああ、辛い」

また言った。

「今にも沈みそうだしな」

「そうだな。果たしてどうなるか」

「先は暗いかもな」

夜空を見上げながら二人で話す。そのうえで今は寝た。夜空の星達だけがやけに美しい。しかし今の二人にとってはその美しさは全く無縁のものだった。

途中雨にも遭い水は確保できた。魚も順調に手に入り捌かれた。

そのうえで三日経った。その三日の間にであった。

小舟はさらに傷んできていた。さらに沈みそうになる。二人はその小舟の上にいる。そのうえでこう話をするのであった。

「浮かんでいるのが不思議だな」

「全くだ。そしてだ」

ここでクイーケグは言った。

「まずいかもな」

「まずい？」

「あれを見る」

右手の先を指差してだ。そのうえでの言葉だった。

「あれをだ」

「あれか」

「そうだ、あれだ」

見ればだ。そこに大きな三角のものが見えていた。それは。

第三章

「わかるな」

「鮫か」

「どうやら小舟のことを察して来たな」

「沈んだところか」

「しかも一匹だけではない」

クイーケエグの言葉は続く。

「鮫は一匹では来ない」

「そうだな。何匹も来るな」

「そうだ」

イシュメールもクイーケエグもそれはよく知っていた。船乗りをしていれば嫌でも鮫のことは知る。その動きもよくである。

「すぐにな」

「この小舟もいよいよ危ないか」

「そういうことだ。どうする？」

そしてだ。クイーケエグはイシュメールに顔を向けてだ。そのうえで問うてきた。

「これからだが。どうする？」

「どうする？何をだ？」

「今俺達はこの小舟に二人でいる」

「ああ」

「小舟が危ないのは二人でいる重さからかも知れない」
このことを言うのだった。

「そしてだ。それで一人いなくなればどうなるか」

「軽くなって小舟の負担が減ってか」

「そうだ。少しでも長生きできる」

こうイシュメールに言うのだった。

「どうだ、それは」

「俺が死ぬか御前が死ぬかか」

「俺が行こう」

クイーケグは自分から言ってきた。

「一人でいればだ。それだけだ」

「一人ならか」

「そうだ、一人か」

イシュメールはここまで聞いてだ。彼も考える顔になった。そうしてそのうえでそのクイーケグに対して言葉を返して言ってきたのだった。

「一人なら舟がもつか」

「二人でいるよりは遙かにな」

「そしてそれだけ救援が来てくれるまでもつ可能性もある」

「そうだ。どうだ」

またイシュメールに言ってきた。

「それはどうだ」

「御前の考えは聞いたさ」

イシュメールはまず彼にこう返した。

「考えはな」

「ではそれではな。俺は」

「いや、待て」

「待てというのか」

「それ位なら俺が飛び込むさ」

「そう言うのか」

「俺はそういうのが嫌いなんだよ」

彼は微笑んでだ。そのうえでクイーケグに言葉を返したのだった。

そしてだ。彼はまた言った。

「人を犠牲にして自分が生き残るのはな」

「嫌いか」

「それにだ。俺だけでどうして魚を手に入れたりするんだ？」

「御前も釣りができる」

「俺のなんか全然釣れないさ。御前が殆ど獲ってるだろ」

「そっついえばそうか」

イシユメールのその言葉に頷くクイークエグだった。

第四章

「それもまたか」

「そうだ、それならだ」

「それなら？」

「二人で残った方がずっといいさ」

笑ってクイークエグに話した。

「だからな。その話はなしにしよう」

「しかしこのまま二人でいればだ」

「いればか」

「二人共終わりだぞ」

イシュメールの目を見ての言葉だ。

「それでもいいのか」

「その時はその時さ。じゃあ俺が出ようか」

「それは駄目だ」

クイークエグはイシュメールのその言葉をすぐに尻き返した。

「絶対にだ。それは駄目だ」

「そうだな。駄目だな」

「俺もそういうことは嫌いだ」

イシュメールにまた言った。

「それは絶対にするな」

「それなら二人で残ればいいさ。死ねば諸共だ」

「それでいいか」

「いい。二人でいようぜ」

「わかった。ならそうする」

クイークエグもそれに頷いてだ。そうしてだった。

彼は落ち着いた顔になってそのうえで海に手をすぐに入れて。猫が魚を獲るようにしてだ。イシュメールに対して差し出してきた。

「捌いてくれ」

「わかった。じゃあ食うか」

「そうしよう」

こうして二人はどちらも残ることになった。その今にも沈みそうな小舟の中で、である。二人はそのまま二日一緒にいた。するとだつた。

近くに船が来た。かなり大きな船だ。しかも二人の方に来ていた。

「助かったか」

「そうだな」

クイークエグは微笑むイシュメールに無表情なまま返した。

「運がよかった」

「運かね」

しかしここでイシュメールは言うのだった。

「本当に運かね」

「運ではないというのか」

「俺達がどつちかを見捨てていたらな」

「その時はか」

「助けも来なかったんじゃないのか」

こうクイークエグに言うのである。

「その時はだ。死んでいたか」

「どつちもな。神様つてのは見ているからな」

「見ているか」

「俺達があの時。どつちかを犠牲にしていたら」

「そうか。今こうして二人は助からなかったか」

「そもそも二日も魚とか手に入らなかっただろ」

「そうだな」

クイークエグは食べ物のお話をされるとわかった。それでだ。

「それは確かだな」

「そういうことだ。これでわかったな」

「ああ、わかった」

それでわかった彼だった。頷きもする。

「そう言われるとな」

「さあ、本当に助けが来るぜ」

その船から小舟が下りてきた。そうしてだった。

二人は助け出されそれまで二人がいた小舟は沈んでいく。イシユメールは船の上からその沈んでいく小舟を見ながらクイーケグに言った。

「ぎりぎりだったな」

「そうだな。本当にあと僅かだった」

「やっぱり神様は見てるんだよ」

彼はまた言った。

「他人を見捨てる奴は助かりはしないんだよ」

「そういうことか」

「俺はそう思うぜ。っていうか自分のことしか考えない奴なんてな」

「自分から破滅するか」

「そういうものだろ。俺だけの考えかも知れないけれどな」

「しかしその通りだろうな。それではだ」

クイーケグもイシユメールを見てだ。最後に言ってきた。

「国に帰ればだ。飲むか」

「ああ、二人でな」

イシユメールは笑顔でクイーケグの言葉に返した。大海原は何処までも青く広がっていた。その海は今二人を優しく見守っているようだった。彼等の全てを見たようにだ。

浮舟 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1386o/>

浮舟

2010年10月8日12時12分発行